・必ずおとずれる多文化共生社会にきちんと対応できる体制づくりを整え、考えていくことの大切さを痛感しました。（50代、小学校教諭）
・神奈川県の進学ガイダンスは、教育委員会との連携がとれていて、高校の先生がたくさん参加しているところに羨ましさを感じた。（20代、学生）
・義務教育ではない高校で、神奈川県ではこれだけの支援が行われていることに感動。（50代、中学校教諭）

＜第２部（パネルディスカッション）について＞

・関東でそれぞれの場で活動されている方々の話を一挙に聞け、興味深かった。（20代、学生）
・フレックススクールという学校があることを初めて知った。（20代、学生）
・それぞれの地域においての支援内容がわかり、このように地域ごとに意見交換し、情報を共有することの重要性を知ることができた。（10代、学生）

＜全体を通して＞

・大学が組織作りの核となっていただけたら、ありがたい。（50代、小学校教諭）
・教員であることの意味を改めて自分に問い直しました。（50代、小学校教諭）
・このようなフォーラムに参加する人が増え、認知が広まり、実際に行動を起こす人が増えれば、より良い社会になると思った。（20代、学生）
・今まであまり今回の話し合いのテーマのような事を気にしたことがなかったが、グローバルな世界になっていく中で、一番根本の問題なのではないかと感じた。（10代、学生）
・教員になり初めて外国につながりのある子どもに対する特別な配慮が必要なことを知ったのが、つい最近の話だった。教育学部で必修の講座が必要という話に強く共感する。（30代、小学校教諭）

平成26年度
第3回外国人児童生徒支援会議報告

宇都宮大学国際学部特任准教授　若林秀樹

２月３日に開催された「外国人児童生徒支援会議」（以下、支援会議）は、栃木県内40小中学校の外国人児童生徒教育拠点校（以下、拠点校）の担当教員をメンバーとする研究会です。今年度最終回となる今回は、年度末の忙しい時期にも関わらず、学校現場から27名の教員に集まっていただく事が出来ました。本年度もご理解とご協力をいただいた各拠点校に、この場であらためて感謝の気持ちをお伝えします。

支援会議の前半は３つの報告や研修をおこないました。

一つ目は、「内地留学生報告書から」と題し、過去の宇都宮大学ポルトガル語内地留学生報告書の中から、現場で有効な外国人児童生徒支援教材の紹介をおこないました。既存のテキストを翻訳したものや、通知表に切り貼りできる保護者向け通知文例集など興味深い教材が多く、参加者からは「使ってみたい」との意見を聞くことができました。これらの教材は冊子として配布することを目標に、次年度の支援会議で整理を進めたいと思います。なお、この報告は、現在ポルトガル語研修で内地留学中の、栃木康子さん（壬生小学校）と伴靖代さん（両郷中央小）のお二人におこなっていただきました。

前半二つ目は、今年度施行された「特別の教育課程」における、ポイント研修をおこないました。「従来の支援形態を効果的に維持する」にあたっての共通理解や、「DLA による計測結果をまずは校内で共有する」事の意義を確認するなど、新たな制度に拠点校同士が手を取り合って取り組もうという気持ちを共有しました。

三つ目は、県内９市１町の学校長代表や教育委員会担当者をメンバーとする HANDS プロジェクト「外国人児童生徒教育推進協議会」の報告をおこないました。特に、外国人児童生徒のキャリア形成において重要となる高校入試制度のあり方や、小中学校と高等学校の連携の重要性についてなど、学校長や教育委員会担当者が建設的な話し合いを進めている事を報告すると、多くの参加者に喜びの表情が見られました。かつては「孤軍奮闘」と言われた拠点校担当教員ですが、管理者を中心に学校全体で取り組む時代がやってきたことを感じました。

支援会議の後半は、「多言語資料作成の実践２」と題し、前回に引き続き佐野市外国人児童生徒指導助手の原田真理子先生の協力の下、栃木県版「学校生活の手引き」作成に向け話し合いました。外国人児童生徒教育分野の発展に伴い、現在はインターネットを通して全国の自治体や学校が作成した翻訳資料を共有できるシステムが整っています。しかし、多地域の資料は使用する前に「手直し」する必要があり、専門の教員以外にとって依然ハードルは高いと言えます。そこで有効になるのが、「目の前にあってそのまま（地域で）使える資料」です。

支援会議では、今回の「学校生活の手引き」のほか、「保護者向け通知文」や「通知表のための文例集」など、栃木県内でユニバーサルに使用できる資料を作成し整備する計画をしています。特徴としては、従来のように「母語翻訳」に頼るのではなく、教員･子ども（日本人も含む）･保護者が「やさしい日本語」を共有することによって理解し合うことのできる資料を目指しています。

これら資料作成の経緯では、ベテランの担当教員がスキルをまとめて伝えるチャンスや、新人の担当教員が課題を整理して解決するチャンスなど、資料の完成以外に「人と人の関わり」を多く創出できると考えており、それこそが支援会議の目標でもあると言えるでしょう。次年度は HANDS 第二期の最終年度という節目の年でもあり、支援会議の存在意義を体現できる資料の刊行に向けて、積極的に取り組みたいと考えています。

第6回グローバル教育セミナー報告

宇都宮大学大学院国際学研究科博士後期課程
国際学部付属多文化公共圏センター研究員
根本 久美子

第６回グローバル教育セミナーが、2014 年 12 月 11 日（木）、本大学の大学生会館にて開催されました。今回のセミナーは、昨年に引き続きグローバル化する世界の中にあって生じる貧富の格差を社会の構造的問題と捉え、弱者としての「子どもの貧困」について様々な視点から共に考えることを目的として開催されました。セミナーは、学生による児童労働のワークショップ体験の録画発表、児童労働に関する NGO の講師による講演、そして、パネルディスカッションの３部構成で行われました。

セミナー開催に先立ち「市民社会論」や「途上国経済発展論」の講座を履修している本学の学生たちが、NGO の ACE 作成の児童労働を考